IS(インフィニット・ストラトス）　天才の助手は不死鳥

アルトアイゼン・リーゼ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ（インフィニット・ストラトス）　天才の助手は不死鳥

【Ｎコード】
Ｎ９６６０Ｚ

【作者名】
アルトアイゼン・リーゼ

【あらすじ】
篠ノ之　束の助手を務め、世界中を渡り歩きＩＳ世界では、その首に途轍もない程の懸賞金を掛けられ世界中がその力を欲する程のＩＳを操り不死鳥という異名を持つ　鳳凰神　覇心
彼は束の指示でＩＳ学園に行く事となる

羽ばたく時を待つ不死鳥

「ではＳＨＲを始めますそれでは皆さん１年間宜しくお願いします」
「「「・・・」」」
先生が挨拶をするが皆無視
「え～っと・・・では自己紹介をお願いします・・・」
おいおい先生だいじょうぶかよ・・・涙目になってんじゃね～か・・・
ってか誰か助けてくれ！まわり一面女子女子！！んだこのカオスワールドは！？
誰か～！！ＨＥＬＰ～ＭＥ～！！！
「ではお次は・・・織斑　一夏君！」
「え？あっはい」
俺は席を立ち上がった
「え～っと・・・織斑　一夏、以上です」
ガタタッ！！っという音を立てて席から落ちる生徒が多数
・・・間違った事言った？嫌自己紹介だから本当の事言っただけ
がその時俺へのプレッシャーを感じたため軽く頭を横に傾けた
すると頭の横を出席簿が通過した！？ってか出席簿ですか！？
「お前はまともに自己紹介もできんのか？」
「・・・って言われても・・・俺の事情を良く知ってるのは貴女で

しょう・・・・？」
「・・・そうだったな・・・」

そう言って俺の姉　織斑　千冬は黒板の前まで戻って行った

「ここで皆に知らせる事がある、今織斑　一夏の３つ右の席
空白の席だが今そこに座る生徒が来た、入れ」

先生に言われては行ってきたのは身長が高く１８７程度の長身
赤と青、それぞれ違う色の瞳・・・確かオッドアイだったか？
なんかの病気とかでなるとかネットで見た事あるぞ
背中まであるかという長い銀色の髪
アルビノであってるかな？俺は雑学には少し自信あるけど在ってる
自信は無い
そして極め付けはその顔の無表情さ、すみません！そのクールさ２
ミリでいいんで
分けてください！！だけどかなりのイケメンだ、上、中、下っ表す
んだったら
特上か？いや上、中、下で表せてね～こういうのを絶世の美男子っ
て言うのか？

「挨拶をしろ」
「・・・鳳凰神　覇心・・・
年は１８・・・趣味、読書」

鳳凰神！？まさかと思うけど・・・心兄さん！？
嫌々無いか・・・心兄さん・・・俺を庇って・・・死んだはずだし・
・・
そして俺の疑問は晴れないままＨＲは終わった
そしてクラスの外からはまるで珍獣でも見るかの様に俺を見る女子

達がいる
勘弁してほしいな・・・
すると心兄ｓ・・・鳳凰神さんに近づく一人の女子がいた
金髪をの縦ロール？してる女子だ
俺は聞き耳を立てる

「ちょっとよろしくて？」

明らかに自分が上みたいな言い方だな
話しかける者としてその態度はどう～よ・・・

「・・・ミス・オルコット・・・何の要件で？」

あり？そんな受け答えすんの？

「あら、それ一応お話が出来そうですわね
では私もミスタ鳳凰神と呼ばせていただきますわ」

なんか・・・少し心を許したって言うのかな・・・？

「鳳凰神では長い・・・覇心か心で構わん・・・」
「私は会って間もない殿方を名前では呼びません事よ？」

でも一々鳳凰神言うのもどうかと・・・

「貴方は何故そこの織斑　一夏のように報道されなかったのですか？」

ああそういえばそうだな
俺と同じ男でＩＳを動かせるなら報道されても言いよう気するな

「俺がある人の元にいたからだ」

じゃあその人のお陰で騒がれなかったって事か？

「誰ですの？その人とやらは」

「・・・ＩＳの生みの親　篠ノ之　束・・・俺は彼女の助手だ」

えええええ！？あの人の助手！！？

「篠ノ之　束！！？今も行方知れずのＩＳの発明者！！？貴方がその助手というのですか！？」

「・・・真実だ、俺は彼女の助手兼専任コックだ」

何故に専任コック・・・

「本当ですの！？」

リンゴ大好きの死神？

すると鳳凰神さん・・・今度から神さんは剣と羽で装飾された赤と黄金の指輪を見せた・・・カッコいいなアレ・・・

「それは？」

「俺の専用ｋ・・・そろそろチャイムが鳴る・・・

出席簿を喰らってもいいのなら続けるが・・・？」

「そ、それは嫌ですわ、ではまた後ほど、ミスター鳳凰神」

「・・・また・・・ミス・オルコット」

二人は別れ席に戻って行った、そして授業がスタートした

覇心サイド

授業は進みクラス代表を決めるはずだったんですが
女子が推薦したのは織斑　一夏と俺
そして俺は手を挙げた

「セシリア・オルコットを推薦する」

なぜかざわつく女子達、理由を言っておこう

「クラス代表はこのクラスを束ね、後の代表戦でも戦う
なら国家の代表候補生ならば強さも兼ね備えいる
ならば打ってつけであろう、どうせ男子が珍しいから俺達がやって
ほうが
面白いという下らん理由で推薦しているんだろう」

これを言うと女子が顔を背ける、図星か

「鳳凰神、言い分は正当な分があるが推薦を受けている以上辞退は
認められない」
「なら、勝負致しましょう！それならば私達との力の差がはっきり
と致しますわ
それで？ハンデは如何ほどにいたしますの？」
「あん？そんなのいらね～よ」
「俺も要らん」

すると教室内は笑いに包まれる

「ふ、二人共ほ、本当に言ってるの」
「男が女より強いって言うのは昔のお話だよ？」

「男が一度言ったことw「では聞くがＩＳ使えるから何故女が男より偉くなった」
ほ、鳳凰さん？」

俺はここにいる全員に対して言った
全員俺を見ている

「ＩＳを使える？だからどうした、この世に４６７のコアはあるがそのすべてが稼働している訳ではない、そしてＩＳの数も限られてる世界中の女性全員がＩＳを使える訳ではない、そして男と女その二つが戦争になった時
ＩＳを使える少数の女性陣は圧倒的な数に囲まれる・・・これでも偉ぶるつもりか？
所詮此所にいるのはアマチュアだけだ、俺にＩＳを使ってでも勝てる？
その自信が有るのなら決闘をしに来い」

すると笑っていた女子全員が静まりかえる

「では１週間後の放課後に代表決定戦を行う、それで文句はないな？」

そして授業は進んだ
放課後、俺は誰とも触れ合わずに山田先生から部屋番号を聞き
１２２７部屋に向かった、鍵を開け中に入った
部屋には誰も居らず部屋にいるのは俺一人
そして部屋の中央部にはダンボールが置いてあった
俺には誰からかは検討が着いていた、中を開けると紙が入っていた

『愛する束さんの贈り物ハート♪』

・・・やはり束からか・・・
見た限り俺の荷物を手当たり次第に送ってきたようだな
まあ勝手に弄られるよりはいい
俺はメールを打った

『荷物の郵送感謝する』

っと打って送信した
・・・何故彼女は俺を此所に送ったのだろうか・・・
すると携帯が鳴った
俺は携帯の通話ボタンを押した

「はい・・・もしもし・・・？」
『はいは～い！皆のアイドル！篠ノ之　束だよぉ～！！』
「・・・何でアンタは何時もメールの返信を電話で返す・・・」
『だって～文字で伝えられない事とかあるじゃん！』

スクリーンに映っているのは篠ノ之　束
俺が助手を務める相手でもあり俺の恩人でもある

「で？何か用が有るのか？」
『うん！実はさ～新しいし～君の武装を考えたんだけどさ～』
「今度はどんな物なんだ？」

俺は多少ウンザリ感に包まれながら携帯を机に置き椅子に腰掛ける

『し～君の異名を体現出来る武装を完成させたの！これが！』
「ほう」

俺はその話に興味をそそられる
束の顔はその時は獲物を捉えたのような顔付きになった

『（よし！喰い付いた！）そうなのそうなの！
攻撃を喰らう度にエネルギーをチャージし！しかも攻撃のパワーに応じて
エネルギーをチャージし！そのエネルギーを回復に回したり、防御に回したり
攻撃に使ったり多種多様なのだ！』
「・・・（プルプルッ）」
『あ、あれ？し～君・・・？』
「ありがとう！束姉！！もう最高！！束姉！感謝！感激！束様！！」
『ぶっ～！！！し、ししし、し～君が・・・し～君が・・
お姉ちゃんって言ってくれた～！！！！！』

束は鼻血を出しながら感激する
俺にとって束は助手する相手であり姉のような感じなのだ
嬉しい事があると俺は束姉と呼ぶ、それは数えるほどしかない
そして俺は束姉から武装データを転送して貰い俺の相棒に組み込む

『クォォォオ♪』

その時甲高い鳥の声が聞こえた
これはＩＳ史上初めて男性でありながらＩＳを起動させた天災の助手
不死鳥と言われる青年の物語である

主人公設定

鳳凰神（ほうおうじん）　覇心（はしん）

年齢　１８

身長　１８９ｃｍ

体重　７５？

今作の主人公
一夏、箒、千冬、束とは面識がありＩＳ学園に行くまでは
束の元で助手兼専任コックをしていた
箒の憧れの人でもある、理由はその剣技に惚れ込んだため
そのため箒にやや好意的な目で見られる
千冬を凌駕するまでの身体能力と動体視力、反射神経を誇り
剣道全国大会で３連覇を誇る
親に戦闘マシンのような教育をされそんな親を嫌い家を出た
そして第２回モンド・グロッソにて再会
一夏の誘拐を阻止するために一夏に向けられた銃弾の身代わりとなり
瀕死の重傷を負い一度死に掛ける、その時に一夏は覇心が死んだと
認識してしまう
最後の力を振り絞り親から妹を救い出し親を精神崩壊に追い込みそ
の場を去った
路頭で血塗れのまま妹を抱きしめたまま倒れている所を束が保護し、
彼女の元で暮らす
妹を守るために自らＩＳを開発するが、ＩＳ学園に行く際は激しく
妹に止められた

羽ばたく不死鳥

俺は剣道場に来ている
正直来たくは無いが何故か来てしまった
現在、一夏と箒が試合をやっているがボコボコだな一夏・・・
そして
「メェェェン！！！」
「ちょ！ちょま！」

バシィィィン！！凄まじい音を立てて決まった
一夏は倒れこんだ・・・弱いな・・俺は一夏が倒れている所に足を運んだ

「だらしないな、織斑　一夏」
「ほ、鳳凰さん・・・」

俺は手を貸してやり一夏を立たせた

「昔と比べ・・・弱体化しすぎだ・・・」
「やっぱり！心兄さんなんですか！！？？」
「ああそうだ、お前・・・中学時代バイトでもしてたのか？」
「千冬姉の助けになればいいかなぁって・・・ってそうじゃなくて！！
なんでいきてるですか！！〈ボコゥ！！〉いってぇぇ～～～！！！！」

俺は一夏の頭を殴った、やや煙が出ている

「勝手に殺すな愚か者が・・・ここで焼き尽くすぞ・・・でも箒ち

ゃんは強くなったな」

俺は箒と向かい合うが、箒はもじもじとしている・・・やっぱり忘れてなかったか・・・

「い、いい加減子供扱いは止めてください・・・／／／／／／／」

「悪かったなそれとの人を勝手に殺したバカを扱いてくれ

これじゃあＩＳでの模擬戦処じゃない」

「解りました！！」

「ちょ！」

俺は嘆く一夏を尻目に剣道場を出た

そして模擬戦当日・・・

がここで問題発生、一夏の専用機がこない

「・・・来ないな・・・ってか箒・・・俺、剣道しかやってない気が・・・」

「心さんがお前を扱けといっていただろう！」

「いやでもさ・・・基本知識ぐらい教えてくれても・・・」

箒は眼を逸らした

「眼を逸らすなよ！おうい！？」

「うるさい、少し落ち着け」

すると山田先生が息を切らしてやって来た

「織班君！きみの・・・ＩＳ・・・が届きました・・・」

「え！？本当ですか！？」

「はい！これが君のＩＳ！白式です！」

そこに有ったのは何処までも真っ白なＩＳ

「これが・・・俺の・・・」
「さっさと準備して逝ってこい」
「ちょい待ち！心兄！！字が違う！！」
「・・・焼かれたいか？」

軽く一夏を脅し戦いの場に叩き込み負けてきた

「アホ、自分のＩＳの特徴ぐらい掴め」
「ぐぅぅぅう・・・」

一夏に容赦ない罵声を浴びせる俺

「それと心兄になってたぞ、だから子供なのだ」
「鳳凰神、次はお前だ」
「ええ」

俺は相棒を展開する

全身が赤と黄金色に輝く装甲
腰には１本の刀とライフルに大きく神々しい赤と黄金の翼
そして鳥を象ったような頭部のマスク
俺のＩＳ　『永遠の不死鳥（エターナル・フェニックス）』
翼を広げると羽が舞い散っていく

「すっっげぇぇええ！！！カッコいい！！！」

一夏は目を輝かせている

「箒ちゃん、翼を触ってみてくれ」
「つ、翼ですか？」
箒ちゃんは恐る恐る翼に触る
ふわっ・・・柔らかな感触が箒の手に伝わる
「ふっ！ふわふわ・・・柔らかい・・・」
すると箒が翼を抱きしめてきた
「箒ちゃん、面白いだろう？ってか模擬戦行かんと」
翼を離してもらい翼を羽ばたかせて飛び立ちオルコットの待つ空へと飛んだ
「あら逃げたのかと思いましたわって全身装甲（フルスキン）！？」
空中で向き合った時、ミス・オルコットは驚いている
「『永遠の不死鳥（エターナル・フェニックス）』これが相棒の名前だ」
「『永遠の不死鳥』・・・まあいいですわ、何であろうと倒すまでですわ！」
「（行こう、レイ）」
『クォォォオ♪』
試合開始
まずセシリアはスターライトｍｋＩＩＩで攻撃する
それは真っ直ぐと心の心臓に向かっていき貫いてしまった

「え？」

セシリアは驚き、手を振るわせる
全てのＩＳに備わっている操縦者の死亡を防ぐ能力『絶対防御』をすり抜け
心臓を貫いた・・・その光景を見た全員が硬直するが・・・
メラメラメラメラ・・・

「な、何の音ですの・・・？・・・・！！！」

セシリアはなにかが燃えるような音に気づき辺りを見渡すと自分が貫いた
心の心臓部が・・・青い炎を纏い燃えているのだ・・・
そして穴が空いた箇所は塞がった

「・・・しっかり作動したな、『不死鳥の復活（フェニックス・リターン）』流石レイだ」
「だ、大丈夫なんですの！！！？？」

セシリアは俺をまじまじと見る

「問題ない、エネルギーも減っていない、万全だ」
「ええ！？で、でも確かに心臓を！！」
「ああ、俺の心臓は普通の人とは逆の方にあるんだ、問題ない」

俺は翼を広げ戦闘態勢を取る

「不死鳥は死なない、炎の中から・・・蘇る」
「・・・そうでしたわね・・・不死鳥は不死なのですから・・・いきます！！」

セシリアは再びスターライトｍｋＩＩＩを構え放ってくる
俺は翼をはためかせて反転する勢いで回避する
そのまま急降下する、それを逃さんとばかりに連射し攻撃してくる
レーザーが軽く翼を霞めるが問題ないダメージにすらならない
地面に到達し地面を削るように着地しライフルを構える唯のライフルではない
精密連射遠近射撃荷電粒子砲である
早い話超連射で精密遠距離射撃も出来る万能ライフル『無限の雷撃（インフィニティ・ボルト）』
それを構え

「永遠の不死鳥、目標への攻撃を開始する」

連射を開始する
ピシュゥゥゥン！！
その音とも有り得ないほどの弾幕が張られセシリアは更に上空に開始する道しかなかった

「狙い・・・撃ち抜く！！」

ポインターとセシリアが重なり合った時に引き金を引き命中させた
相変わらず恐ろしいまでの命中精度だ、そして威力・・・
ロックオン・・・あいつが出てくるな・・・懐かしい
俺は翼を大きく広げて『無限の業火（インフィニティ・ボルケーノ）』を握り締める
翼を羽ばたかせ土煙を立てながら空に舞い上がる
そして刀を構えセシリアと向かう

「くっ！私とブルー・ティアーズの奏でるワルツで踊りなさい！！」

切り札であるビット型の武器のブルー・ティアーズを展開する
あらゆる方向からオールレンジ攻撃が襲いかかって来るが恐れる必

要はない

「・・・ダンスは・・・得意だ！」

翼をまた一段と大きく羽ばたかせ攻撃を避けつつ美しく踊るように避ける

「う、美しいですわ・・・ですが！当たりなさい！！」

が当たらない、不死鳥に当てたとしても生き返るだけ

俺は刀を構えた

「鳳凰神流、攻式一の型、『舞鳳凰』」

一瞬でセシリアに接近し、計１５回太刀を決める瞬間技

そしてその技の前にセシリアのエネルギーは０を示した

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9660z/

IS(インフィニット・ストラトス)　天才の助手は不死鳥

2012年1月2日02時47分発行